

読者よ、これは誠実な書物なのだ。この本では、内輪の、私的な目的しか定めていないことを、あらかじめ、きみにお知らせしておきたい。きみの役に立てばとか、わたしの名譽となればといったことは、いっさい考えなかった。もともと、わたしの力量では、そうした企てなど不可能なのではあるけれど。わたしは、親族や友人たちの個人的な便宜のために、この本を捧げたのである。私が他界してから——やがて彼らは、このことに直面しなくてはいけない——、この本に、わたしのありようや人となりをしるのぶよすがを見いだして、彼らが、わたしに対する知識を、より完全で、生き生きとしたものとしてほしいのだ。

世間で評判になりたいのなら、わたしだって、もっと技巧をこらし、きらびやかに身を飾ったにちがいない。でもそうした気づかいや細工なしに、単純で、自然で、ごくふつうのわたしという人間を見てほしいのだ。わたしは、このわたしを描いているのだから。ここには、わたしの欠点がある、ありのままに読みとれるし、わたしの至らない点や自然の姿が、社会的な礼節の許すかぎり、あからさまに描かれている。原初の自然の法にしたがって、いまだに幸福で自由な生き方をしているといわれる人々のなかで暮らしていたならば、わたしが、よろこんで、わが姿をまるごと、はだかのままに描いたであろうことは、きみに誓っていい。

つまり、読者よ、わたし自身が、わたしの本の題材なのだ。だからして、こんな、たわいのない、むなししい主題のために、きみの暇な時間を使うなんて、理屈にあわないではないか。では、さらば。

「読者に」

① われわれに対して怒った人々が、復讐心からられていて、しかも生殺与奪の権を握っているようなときに、そうした相手の気持ちをやわらげる、もともともありふれた方法とは、帰順の意志を示すことにより、なんとか心を動かして、憐れみや同情の念をいだかせることだ。しかしながら、勇敢さや、敢然とした揺るぎのなさといった、これとはまったく反対の手段によって、同じ結果がもたらされることも、ときには見られる。

わがギュイエンヌの土地をあれほどに長いこと支配していた、ウエールズ公エドワードは、その資質からしても、境遇からしても、いちじるしく恵まれた方であったが、リモージュの人々

による激しい攻撃を受けたあげくに、力づくでその町を奪い取ると、民衆の阿鼻叫喚にも、殺戮に身をゆだねて足下にひれ伏し慈悲を請う女子供の叫び声にも耳を貸さず、ぐいぐい進んでいった。町の中へと入っていくと、フランスの貴人が、信じがたいほどの勇敢さでもって、たった三人だけで、勝ち誇る軍勢をくい止めようとして奮闘しているではないか。ウエールズ公は、この偉大なる勇気を称賛して敬意を表し、はじめて怒りの矛先をおさめたのであった。そして、この三人のみならず、リモージュの町の全住民に許しを与えたのである。

②

わたしなどは、このふたつの手段のどちらにも、たやすく心を動かされてしまふに決まっている。というのも、わたしは極端にだらしがなくて、すぐ憐憫や寛大さといった心に負けてしまうのだ。思うに、わたしは、あれこれ考量するよりも、憐憫の情のほうへと、ごく当然のごとくに流れていってしまうのだ。

③

まったくもって、人間とは、おどろくほど空しく、変わりやすく、うつろいやすい存在なのであり、人間に対して、確固とした、一律の判断を立てるのはむずかしい。

第一巻 第一章 「人は異なる手段で、同じような目的に到達する」

『エッセー』宮下志朗訳（白水社）